

家族システム評価のための基礎概念： オルソンの円環モデルを中心として

武 田 文 雄
立 木 茂 雄

本稿では、家族システムの機能を診断・評価するために開発された、米国ミネソタ大学のオルソンの円環モデル (Circumplex Model) について考察する。このモデルは、きずな (Cohesion) ・かじとり (Adaptability) ・コミュニケーション (Communication) の次元から構成されている。これらの次元は、米国における過去50年間にわたる家族研究の結果から演繹的に導びきだされたものである (磯田・清水・大熊, 1987)。このモデルに対する理論的・実証的な研究は、米国以外にもカナダ (e.g., Tatsuki, 1985 ; Skinner, 1987) や日本 (国谷, 1985 ; 佐藤, 1986 ; 石川, 1987 ; 池埜, 1987 ; 磯田・清水・大熊, 1987 ; 大熊, 1987 ; 上野・亀口, 1987 ; 清水・高梨, in press) の各国で、精力的に行なわれてきている。

ここでは、理論的な演繹の度合がたかく、実証的な検討も豊富になされている「きずな」と「かじとり」の二つの次元について、関連する概念や研究をふり返りたい。その方法としては、オルソンらによる初期の一連の論文 (Olson, Sprenkle and Russell, 1979 ; Olson, Russell and Sprenkle, 1980 ; Olson, McCubbin et al., 1983) を主テキストとして用いる。しかし、必要に応じてそれ以外の関連文献 (e.g., Tatsuki, 1985) も付加している。

なお、特にことわりのない場合をのぞき、Family Cohesion は「きずな」と、また Family Adaptability は「かじとり」と訳してある。ただし、Cohesion が特に家族以外の小集団に対して用いられるときには、より伝統的な訳語である「凝集性」あるいは「集団凝集性」という語も用いる。きずな水準が極度に高い場合を指す enmeshment に対しては「ベッタリ」を、きずなが中庸ではあるが、ある程度高い場合を指す connected に対しては「ピツタリ」という訳を当て

た。同様に、中庸ではあるが、きずながある程度低めの separated に対しては「サラリ」を、きずなが極端に低い場合を指す disengagement に対しては「バラバラ」という訳語をあてている。かじとりについては、それが極端に高い場合を指す chaotic には「てんやわんや」を、かじとりが中庸ではあるがある程度高い flexible には「柔軟」という語を当てた。同様にかじとりが中庸であるが、どちらかというやや固めを指す structured には「キッチリ」と、またかじとりが極端に固い場合を指す rigid には「融通無し」という語を用いた。

われわれは、神戸市の児童相談所を中心として、家族アセスメントのワークショップや思春期の子を持つ父親・母親講座プログラムを展開してきた。これらの語は、その参加者との相互交流を通じて練られ、生まれてきたものである。

I. 「きずな」次元に関する研究

システムとしての家族の健康・不健康度を、「家族の成員間の心理的・社会的な距離」にもとめる考え方は、1. 精神医学, 2. 社会学, 3. 社会心理学, 4. 人類学など、広範な分野に見られる。40以上にのぼる概念がそのために提唱されたが、オルソンらはこれらを統合し、家族のきずな (Family Cohesion) の次元と名づけた。各分野で、この概念がどのように取り上げられてきたか、以下に追ってみよう。

1. 精神医学的研究

家族システムの機能に関する初期の概念は、その多くが家族療法を専門とする精神科医によって提唱された。円環モデルという統合的な視点からながめると、これらの概念は、きずな次元が極端

に高いか、あるいは逆に極端に低い状態を指すもので占められている。これは、いずれかの形できずなが極端である家族が、家族療法の臨床の場では非常に多いことに、由来するものなのだろう。例えば、精神医学の発展をめざすグループ (GAP, the Group for the Advancement of Psychiatry) の報告書、『葛藤下にある家族の治療』によると、家族療法家の87% (270人) が治療の第1目標として成員の自主性や自律性の改善をあげている。これは、きずな次元を極端な「バラバラ」や「ベッタリ」から、より中庸な水準へ引き戻すことに他ならない。

きずなが極端に強い状態、つまり「ベッタリ」の段階をあらわすものとして、以下のような概念が提唱された。すなわち、ウィンらは「疑似相互性 (pseudomutuality)」 (Wynne et al., 1958)、ボーエンは「分離されない家族我の集まり (undifferentiated family ego mass)」 (Bowen, 1960)、スターリンは「しばりつけ (binding)」 (Stierlin, 1974)、リイスは「一致に敏感な家族 (consensus-sensitive family)」 (Reiss, 1971) と呼んだ。

一方、きずなが極端に弱い状態、すなわち「バラバラ」の段階をあらわすのに、ボーエンは「情緒的離婚 (emotional divorce)」 (Bowen, 1960)、ミニューチンは「バラバラ (disengagement)」 (Minuchin, 1974)、ウィンらは「疑似敵意性 (pseudohostility)」 (Wynne et al., 1958)、スターリンは「追い出し (expelling)」 (Stierlin, 1974) という語を用いた。

興味深いことは、ミニューチンをのぞけば、これらの精神科医のほとんどが、ほぼ同時期に米国精神衛生研究所 (the National Institute of Mental Health, NIMH) の、しかも同じ成人精神医学部門 (Adult Psychiatry Branch) で研究していたということである。にもかかわらず、それぞれが独自の用語を用いていたことになる。

各精神科医のきずなに関する概念について、もう少し詳しく見てみよう。ウィンらは、精神分裂病者の家族は個人の自立性を犠牲にしてまでも家族と一体化しようとすることに注目した。そして、この過程を「疑似相互性」 (pseudomutuality) と名づけた。疑似相互性の強い家族では、成

員がはっきりと自己主張すると、家族内に緊張感が高まる。成員個々の差異を表面化させると、家族はバラバラになるのではないかと、分離を意味するのではないかと、という不安が等しく全員に生じるからである。この緊張感には、ある特定の個人を失うことにたいする不安にとどまらない。さらには家族関係全体が消失してしまうのではないかと、という恐れさえ生まれるのである (Wynne et al., 1958)。

スターリンは、連帯をもとめる求心性の力 (centripetal force) と、分離をもとめる遠心性の力 (centrifugal force) という、二つの対立する力が家族内には存在すると考えた。家族はたえずその両者のバランスをとろうとする。求心性の力とは、家族の成員を知的・感情的に同一化させようとするもので、強い家族のきずなをあらわしている。これとは反対に遠心性の力とは、家族の成員を家族システムから遠ざけようとする力で、弱いきずなをあらわしている。家族は、これらの対立する二つの力のバランスが適度につり合っている際に、もっとも効果的に機能する。このモデルによれば、極度に求心的な家族では成員の個別化が行なわれず、精神病的症状を持つ子供がうまれる。また逆に極度に遠心的な家族 (バラバラ) では、最小限の養育しかおこなわれず、思いやりや慈しみの心が養われない。そのため反社会的となり非行や薬物乱用などにはしるという (Stierlin, 1974)。求心性と遠心性の力のバランスに関する議論は、また Beavers ら (1976) のモデルにも受け継がれている。

きずなが過度に強い家族については、そのほかにもかなりの数の研究者が関心をよせてきた。たとえば、ホフマンはベッタリの家族の非機能的性質について言及している (Hoffman, 1975)。またミニューチンもベッタリの家族について記述している。ベッタリの家族では、家族内の特定の2者の間だけでのやりとりはほとんど起こらない。他の (第3、第4の) 成員が、必ず割り込んでくるというのである (Minuchin, 1974)。また、外界に対してまるで要塞のように家族全員が臨戦体制で身構えているような場合、家族のきずなは極度に高くなる (小此木, 1986)。

それでは、きずなが逆に極端に低い (バラバラ)

場合はどうか。このような家族では、成員の間に連帯感が生じない。もしなんらかの連帯が起これば、それは常に片方の親と子を含む分派的連合である (Minuchin, 1974)。

一方, Satir (1964) によれば, 家族のきずなが適度であることと夫婦間に強い連合が存在することの間には強い関連性があるという。つまり夫婦のきずなは全ての家族関係の中心であり, 夫婦関係がうまくいかなければ親子関係にも影響が生じるのである。英国 (Orford et al., 1976) や米国 (Moos et al., 1979) におけるアルコール症の予後に関する研究でも, 夫婦や家族の情緒的なきずなが, 問題の再発をふせぐうえで, きわめて重要なポイントであることが示されている。

カーペルは, 人がいかにして個人の距離 (the "I") と家族との関係 (the "we") の2重性に対処するのか, またその方法は成長の各段階 (未成熟期, 変遷期, 成熟期) でどのように異なるかを説明している。未成熟の段階で人は, 家族と完全な没交渉をまもることによって距離を保つか, あるいは家族と完全に融合した関係を結ぶ。いずれにせよ, 距離と関係は二者択一の問題と見なされる。この両方をバランスよく維持できるのは, 成熟の段階だけである。成熟期では, 個別化と対話が相互に促進しあうのである (Karpel, 1976)。

2. 社会学的研究

社会学者も, きずな次元について実証的な研究をおこなってきた。初期のものとしては, エンジェルの研究がある。彼は1933年より始まった大恐慌下にある家族について調査した。この研究によってクローズアップされたのが, 「家族の統合 (family integration)」と「家族のかじとり (family adaptability)」の2点の重要性である (Angell, 1936)。さらにヒルは, 戦争による離別と再会によって家族に生ずるストレスについて研究した。この中で, かじとりと統合の二つの変数を組み合わせることによって動的な安定性を明らかにした (Hill, 1949)。

家族の「統合」(integration) や「連帯」(solidarity) は, 家族に関する社会学的な調査では重要な鍵概念とされ, 実証的な研究がその後も行なわれた。例えば, 東欧ユダヤ系家族と比較し, 南

部イタリア系家族では家族の連帯が何よりも強調されることが示された (Strodtbeck, 1958)。また, 米国とインドの青少年を比較すると, インドでは米国以上に家族の連帯や結合が重視されるという (Sandberg et al., 1969)。一方シュトラウスは, 労働者家族の問題解決行動について国際比較を行なった。その結果, 各国とも共通して, 成員がそれぞれバラバラな問題解決にはしることを発見した (Straus, 1968)。また, グルエック夫妻は, 非行家庭では成員のきずながきわめて低いことを報告している (Glueck and Glueck, 1950)。

ナイとラッシングは, 家族の統合を6つの下位次元に分けて考察した。それらは, 結社的統合 (associational integration), 情動的統合 (affectual intergration), 了解的統合 (consensual intergration), 機能的統合 (functional intergration), 規範的統合 (normative intergration), 目標の統合 (goal intergration) の6つである (Nye and Rushing, 1969)。このうち3つの次元 (結社, 情動, 了解的統合) は後に実証的に研究された (Bergtson and Black, 1973)。

ヘスとハンデルは家族行動の中心的テーマとして, 「離別」(separateness) と「結合」(connectedness) という両極の概念を用いた (Hess and Handel, 1959)。またカリスは, 人々が余暇をどう過ごすのか, 類型化を試みている。そのなかでも, きずなは重要な次元として用いられた。彼女のモデルの両極は他の研究とよく似ている。すなわち, 一方は極度の結合志向である。これは「全員の了解あるいは全体的同一化への病的なまでの追求」と定義された。もう一方は, 極端な離別志向である。これは「対人的距離の病的なまでの追求」と定義されている (Carisse, 1975)。

3. 社会心理学的研究

きずな次元は小集団の理論家や調査者にもなじみの深い概念である。小集団研究の分野では, 通常「連帯」(solidarity) という言葉が用いられる。これはグループの成員が, そのグループに感じている魅力であると定義される (Festinger, Schachter and Back, 1950; Fiedler and Neuwese, 1965; Thibault and Kelly, 1967)。カートライトとザンダーは, 「凝集性」(cohesion) を「全成

員をその小集団にとどませようとする諸力の結果生ずるもの」(Cartwright and Zander, 1962, p. 10)と定義した。

ヤーロムは集団心理療法の重要な治療要素として「集団の凝集性 (group cohesion)」を考えた。彼は「集団の凝集性」を効果的な治療のための必須条件とし、関連する文献について広範なレビューを行なっている。また彼はその尺度を発表し、それが集団心理療法の奏功度と結びついていることを報告した。そして「凝集性はグループの基本的な特性で広く調査されているが、あまり理解されていない。しかし小集団の基本的な特性である」(Yalom, 1970, p. 37)と結論づけている。

レヴィンガーは夫婦関係がなぜ維持されるのか、あるいはなぜ解消されるのかを説明するのに、小集団研究における凝集性の概念を夫婦関係に転用して考察した。彼は「夫婦の凝集性」を「小集団の凝集性」の特別なケースと見なしている。そして夫婦の凝集性は、夫婦関係の持つ心理的魅力や、それを保持しようとする力と正比例し、同時に他者との関係の持つ魅力度と反比例の関係にあるとした (Levinger, 1965)。

一方、ホーキンスは夫婦のきずなを測定する尺度を作成した。この尺度のなかでとくに全体の尺度値との相関が高かった項目は、「抱いたりキスしたりする」、「一緒に笑ったり、楽しんだりする」、「ロマンチックな気持ちを持ったり、その気持ちを互いに伝えあえる」などである (Hawkins, 1968)。なお、この尺度の特徴は、夫婦が相談して一緒に回答するという点である。ホーキンスの尺度は20組の問題を持つ夫婦と、29組の問題を持たない夫婦をはっきりと弁別している。

社会的学習理論の立場から結婚適応度を研究しているオレゴン大学のグループは、余暇を夫婦で一緒に過ごすかどうかと結婚適応度との間に強い関連性があることを示した (Birchler, Weiss, and Vincent, 1975)。一方、問題を持つ夫婦では、一緒にいる時間があまりに多すぎる、あるいは逆にあまりに少なすぎると感じているという (Williams, 1977)。

4. 人類学的研究

ステファンスは、アメリカ文化における「一緒

にいること」の重要性を他の文化と比較しながら考察した。ある文化では夫と妻は別々に住んだり、寝たり、食事をするといった、バラバラの家族形態を維持している。これに対してアメリカでは、個人の自由や自律性は守られるものの、夫婦や家族は一緒に暮らすべきであると考えられている。これらは、アメリカの持つ文化的な規範に基づくものなのである (Stephens, 1963)。

ローゼンブラットも、心理学と人類学の両方から家族を研究した。彼の研究テーマは、アメリカの家族が、「一緒にいること」と「離れていること」について、いかにバランスをとっているか、ということである。家族が一緒にいることはアメリカ社会の規範である。それでは、家族はどのようにして一緒にいながら、同時に「離れていること」を保証するのか。一般の夫婦を対象とした調査 (Rosenblatt and Titus, 1976) では、外出の効用や、家族員が家にいる時にはどのようにして互いとの交渉を避けるのかを明らかにした。同棲中のカップルと、結婚している夫婦の比較調査 (Rosenblatt and Budd, 1975) では、個人の空間やプライバシーの保ち方がどのように異なるかを研究した。また、休暇中の家族に関する研究では、いかにして家族が四六時中互いに顔をつき合わせなければならない事態に対処するのか考察している (Rosenblatt and Russell, 1975)。

5. 要約

近年、きずな次元にもっとも強い関心を示したのは家族療法の分野である。この分野では、きずな次元の特に極端な段階に関係する概念が多く生まれている。しかし、きずな次元に最初に注目したのは社会学者であった。また小集団研究者にとっても、きずなはなじみの深い概念である。きずな次元のバランスはまた、アメリカ社会の文化人類学的な研究のなかでも重要な研究テーマとして取り扱われてきた。このように「きずな」の概念はさまざまな分野で関心が持たれ、用いられている。分野を超えて「きずな」の概念が用いられているということは、きずな次元の妥当性と普遍性をあらわしているものと言えよう。

なお、表1にきずなに関する研究を要約してまとめた。

表1 家族の「きずな」の次元に関する研究

研究者	年	内容
Glueck & Glueck	1950	非行少年を持つ家族は「きずな」が低い。
Festinger, Schachter, & Back	1950	小集団研究の中で、グループ成員がそのグループに感じる魅力を「連帯」(solidarity)としてあらわした。
Fiedler & Neuwese	1965	
Thibault & Kelly	1967	
Wynne et al.	1958	精神分裂病の家族は、「きずな」の次元に相当する疑似相互性 (pseudo-mutuality) が高い。
Strodtbeck	1958	家族の価値と達成感の比較研究で、東欧ユダヤ系家族と比較して南部イタリア系家族は家族連帯をより強調する。
Hess & Handel	1959	家族行動の中心的テーマとして、「離別」対「結合」という「きずな」の両極に相当する概念を用いた。
Bowen	1960	「きずな」のレベルの段階を、「分離されない家族我の集まり (undifferentiated family ego mass)」という用語を用いてあらわした。
Cartwright & Zander	1962	小集団の中にメンバーをどまらせようとする力として、「凝集性 (cohesion)」という用語を用いている。
Stephens	1963	人類学的研究の中で、アメリカの家族には適度の「きずな」が必要であるとした。
Satir	1964	家族の「きずな」には、夫婦間の強い連合が必要であることを明らかにした。
Levinger	1965	夫婦のきずなは、互いに対する心理的な魅力と現在の関係を守ろうとする力に比例し、別の相手との魅力と反比例する。
Hawkins	1968	夫婦の「きずな」尺度を作成し、問題を持った夫婦と健康な夫婦を判別した。
Straus	1968	労働者階級の家族は、「きずな」がバラバラにかたよる。
Sandberg et al.	1969	インドとアメリカの思春期の子供を比べると、インドではアメリカより家族の「きずな」をはるかに大事にする。
Nye & Rushing	1969	「きずな」とよく似た、家族の連帯 (family solidarity) について研究した。
Yalom	1970	集団心理療法の重要な治療要素として、「集団の凝集性 (group cohesion)」を考えた。
Bergtson & Black	1973	Nye と Rushing による「家族の連帯」の中の3つの次元について実証的に研究した。
Stierlin	1974	家族内には連帯を求める求心性の力と、分離を求める遠心性の力という対立する2つの力があるとした。
Hoffman	1975	「きずな」が非常に強いベッタリの家族は、非機能的であるとした。
Carisse	1975	余暇についての研究の中で、重要な次元として「きずな」を用いた。
Birchler, Weiss & Vincent	1975	余暇を一緒に過ごすか別々に過ごすかということと、結婚適応度との関係をさぐった。
Rosenblatt et al.	1975	時間的・空間的に「一緒にいること」と「離れていること」との間に、いかにしてバランスを保っているか、アメリカの家族について調査した。
1976		
1978		
Karpel	1976	「きずな」の変数である内的境界にあたる、個人の距離と家族の距離について研究した。
Orford et al.	1976	アルコール依存症の夫を持つ夫婦に対する治療の予後を予測するのに、家族の「きずな」がもっとも重要だとした。
Williams	1977	問題を持つ夫婦では、一緒にいる時間があまりにも多すぎるか、あるいはあまりにも少なすぎると感じている。
Moos et al.	1979	米国におけるアルコール症の予後に関する研究で、夫婦や家族の情緒的きずなが問題の再発防止に重要であると述べた。

II. 「かじとり」次元に関する研究

円環モデルを構成するもう一つの次元は「かじとり (Family Adaptability)」である。これは、状況に応じて夫婦・家族システムを変化させる能力である。かじとり次元もさまざまな家族理論家や研究者によって用いられ、その重要性が実証されてきた。ここでは、その根底にある形態維持 (morphostasis) と形態変容 (morphogenesis) という対概念にまず焦点をあてたい。形態の維持や変容は、システムのフィードバックと密接に関連している。フィードバックとは、システムに逸脱や誤差が生じたとき、その情報に基づいてシステムを再制御するメカニズムを指す。この場合、フィードバックには2種類あり、負のフィードバックは逸脱や誤差を発見すると、それを極力少なくし、逸脱に対抗してシステムを保守するような (逸脱対抗) 制御を行なう。一方、正のフィードバックはこれとは逆に、逸脱や誤差を発見すると、むしろそれを奨励し、逸脱をより増幅するように働く (Maruyama, 1963; Buckley, 1967)。要するに、負のフィードバックは、システムの現状を保守・維持 (形態維持) する際に重要であり、正のフィードバックはシステムを変化 (形態変容) させる際に、必要なものなのである (Steinglass, 1987)。

1. 形態維持と形態変容

家族療法家による家族システムに関する初期の理論のほとんどは、家族を形態維持フィードバックの観点からとらえている (Haley, 1959; Satir, 1964)。たとえば、Haley (1959) の『関係の第一法則』(First Law of Relationship) は、「ある生体が他者との関係を変えようというそぶりを見せると、その生体に対して他者は働きかけを行い、変化をやめさせようとする」(Haley, 1959, p. 281) と述べている。家族システムは元来、現状維持のために機能すると考えられたのである。

これに対し、スピアやヒルは、家族システムを形態維持からのみ見る考えを批判している (Speer, 1970; Hill, 1971)。確かに形態維持の観点は、重度の障害を持った患者を持つ家族の構造

や機能を探るには効果的であった。こうした理論によって、「家族行動はあるルールによって統制されている」、また「家族内で問題症状を呈している者 (IP, Identified Patient) の逸脱した行動は、家族の均衡を保つ役目を担っている」、ということが理解できたからである。しかし健康な家族の相互作用を説明するには、形態維持モデルだけでは不十分である。このモデルでは、家族の成長や発展という視点にふれることができない。スピアは、次のように述べている (Speer, 1970, p.261)。

対人的な成熟や、基本的な社会構造・社会制度の変化、社会革新、創造性についての関心がかつてないほど高まっている。このような時代において、変化に抵抗し変化を最小限におさえるという概念 (形態維持) に基づくモデルとはあいいれない、またそれだけでは説明できない何かがある。

更に、ウィンは融通性のない現状維持志向は、家族病理の兆候であるとさえ述べている (Wynne et al., 1958, p89)。

家族のライフサイクルを通して融通性を持たず定常性 (ホメオスタシス) を維持しようとする家族は、高度な障害を持っており、不健康である。ずっと家族の定常性を維持し続けることは、不健康な家族の特徴と考えるべきである。

変化を志向する形態変容と、現状維持を志向する形態維持の両者が、健康な家族システムについて考える場合に必要なのである。このような理由から、ミラー (Miller, 1969) の議論にも承服しかねるのである。彼は、直線的な軸上に、家族機能の健康・不健康を考えた。一方の非機能的な極には「形態維持の過程」が置かれた。他方の機能的な極には、「形態変容、あるいは成長の過程」を対置させたのである。

ここ最近の傾向として、家族内の形態変容に、調査や研究の関心が移行してきたようである。ホフマンは、形態維持を中核とする、古い機械的サイバネティック・モデルからたもとを分かったシステム理論家達の著作をまとめている (Hoffman, 1981)。彼女は、Ashby (1960) や Bateson (1979)、Dell (1980) の考えをたどっている。これらの理論家は「進化的フィードバック」の概念を追求した。進化的フィードバックとは、基本的に定常性に基づかないシステムの統括原則を意味

し、あらゆる水準でシステムの形成と展開をつかさどるものである。これらの研究も家族システムの形態変容を重視する立場にある。

2. 形態維持と形態変容のバランス

確かにここまで述べてきた研究は形態維持や形態変容について述べているが、そのバランスの重要性については、あまりふれていない。形態維持と形態変容はかじとりの次元の両極に位置している。もし家族が、これらの極端な段階でのみ機能するならば、どちらも家族システムにとって問題である。成長を保証する家族システムは、形態維持と形態変容の間でバランスが保たれている。ただし、ストレスに見舞われた時、家族にはかなり極端な変化が望まれよう。とは言え、どんなシステムも長期間、形態変容の過程を持続し、かつ健康を保つことはできない。ある程度安定性も維持しなければならないのである。ワーサームは、次のように言っている (Wertheim, 1973, p. 365)。

適度な形態維持が無ければ、家族システムは団結した有力な社会集団になりえない。極端な形態変容は、絶えず変化し続けることを意味する。これでは、コミュニケーションや、親密な対面集団としての家族の生存に最低限必要な、共通の意味や価値、期待の形成さえ不可能となるだろう。

またワーサームは強制された形態維持と、合意に基づく形態維持の違いを明らかにしている。強制の形態維持とは、成員全員による真の合意なしに、家族内で維持されている見せかけの安定性である。これは家族内や個人の孤立や疎外をつくりだし、システム機能の障害の原因ともなる。精神分裂病患者の家族に見られる形態維持は、強制された形態維持の好例である。これに対して、合意の上の形態維持とは、「成員全員の合意によって認められた、家族システムの真の安定性」(Wertheim, 1973, p. 365)を指す。たとえば、FerreiraとWinters (1963, 1965, 1966)によれば、家族内で自然と、物の見方や考え方が一致することは、健康な家族の特徴なのである。

ワーサームによる家族システムの定義は、円環モデルのかじとりの定義に共通する部分が多い。彼女は次のように述べている (Wertheim, 1973, 1975, p.286)。

理想的で適応性のある家族システムには、安定性を促進する、自己補正的な形態維持の過程と、変化を促進し、自己主導的な形態変容の過程との間に、最善の社会・文化的なバランスが存在するのである。

ただし円環モデルにおける適応的な家族システムの定義は、操作的に定義され、測定されうる概念と関係しているので、より具体的に特定化されている。

3. 家族内のリーダーシップ、役割やしつけの柔軟性に関する研究

トールマンは、家族内のリーダーシップや役割を柔軟に変化させ、かじとりを行なうことが健康な家族の特徴であるという仮説を提示した (Tallman, 1970)。トールマンらによる夫婦のかじとりの定義は以下の通りである (Kieren and Tallman, 1972, p. 248)。

(かじとりとは) 直面する問題状況に対して、評価をあらたに下したり、あるいは評価を修正するなどして、役割や対策を変化させることによって、問題状況に効果的に対処する夫婦の能力 (である)。

彼らは、夫婦のかじとりが相互に関係する3つの概念(融通性、共感、動機づけ)から成り立っていると主張し、これらの概念を測定する尺度をつくった (Tallman, 1971; Kieren and Tallman, 1971)。

トールマンを中心とした家族社会学者は、また、変化に対処する際に夫婦や家族が発揮するリーダーシップのスタイルに注目し、これを模擬的な問題解決状況下で実証的に観察した。彼らは、『SIMFAM (模擬的家族活動測定法, Simulated Family Activity Measurement)』とよばれる家族相互作用ゲームを考案した (Straus and Tallman, 1971)。このゲームにはいくつかのヴァリエーションがあるが、たとえばそのうちのひとつでは、玉ころがし台の上にある色つきボールを、適切な色の玉突き棒で、適切な場所に突くのがゲームの目的である。「誰が、どの色の玉突き棒で、どこへ突けばよいか」というルールは家族には知らされない。ただ正・誤を伝えるランプが点灯するだけである。しかも、このゲームの特徴は、家族がルールを発見し、それぞれの役割が安定し

かけると、突然ルールが変わることにある。模擬的な危機状況が演出されるのである。

民主的な問題解決のスタイルを持つ夫婦は、SIMFAMの際の模擬的な危機状況で、夫婦間のリーダーシップをより柔軟に交代させた (Bahr and Rollins, 1971)。また、ブルー・カラーの家族よりも、ホワイト・カラーの家族の方が、危機状況でより柔軟にリーダーシップを交代させた (Tallman and Miller, 1974)。ブルー・カラーの家族では、家長としての父親 (夫) が、リーダーの役割を常に期待されており、それ以外のスタイルは考えられない。一方、ホワイト・カラーの家族では、民主的なリーダーシップが受け入れられており、SIMFAMによる危機に、より適切に対応できたのだと結論づけられた。また、ミラーとウェストマンは SIMFAM と似た別種のゲームを用いて、学力不振児の家族と一般の家族の相互作用を比較観察した。ここでも、学力不振児の家族では、危機状況でリーダー役を柔軟に交代させることがむずかしいと実証された (Miller and Westman, 1966)。

スプレングルとオルソンは、25組の問題をもつ夫婦と、同数の対照群の夫婦の相互作用を SIMFAM をもちいて観察した。危機的状況下では、両群の夫婦は対照的な相互作用を示した。すなわち、問題をもたない夫婦は助言を互いに受け入れ、リーダー役は柔軟に交代した。一方、問題をもつ夫婦では圧倒的に「妻主導型」のリーダーシップ構造を示したのである (Sprenkle and Olson, 1978)。

親子の間のリーダーシップ構造についてはどうか。ロリンズとトーマスによれば、あまりにも放任的なしつけにも、またあまりに独裁的なしつけにも問題がある (Rollins and Thomas, 1975)。417人の大学生を対象にした調査によると、親のしつけが極端に制限的であったり、あるいは逆に極端に許容的であった場合に、子どもの反抗の程度が有意に高いことが実証された (Balswick and Macrides, 1975)。さらに、親のしつけのスタイルと、子どもの反抗の指標であるマリファナ使用の関連性も調査されている。それによると、極端に許容 (自由放任) 的なしつけは高度のマリファナ使用と関連し、極端に制限 (独裁) 的なし

つけは中度のマリファナ使用と関連する。民主的なしつけを受けたと感じている子どもの間では、マリファナ使用は最も低いことが見いだされた (Hunt, 1974)。

家族療法家を対象とした調査を見ても、リーダーシップや役割の柔軟性が重視されていることがわかる。たとえば、1970年の「精神医学の発展をめざすグループ (GAP, the Group for the Advancement of Psychiatry)」の調査 (290人の家族療法家を対象としている) を見てみよう。これによると、家族療法家の第1の目標は、治療している家族に、より融通性のあるリーダーシップ (66%) や、役割の合意について改善 (64%) をあたえることであるという。

家族発達アプローチ (Hill, 1971 ; Hill and Rodgers, 1964) も、家族には変化に応じてそのリーダーシップや役割の構造を変えたり、適応したり、再調整する能力が重要であると考えられる。たとえば、親になることや、子供が学校に通い始める時である。子供が思春期に達すれば、自立を奨励し、またそれを受けいれなければならない。さらに子供の独立、退職への準備など、このような節目節目には、正常な危機がおとずれる。家族はこれに適応してゆかなければならない (Rappoport, 1963)。家族は、その発達の過程で、年齢や家族構成が変化する。そしてそのたびに、家族内の規則が書き換えられてゆかなければならない。このような事態で、融通性のない定常状態、すなわち形態維持のパターンに閉じこめられた家族では、問題が生じやすいと考える。

家族発達アプローチは、いくつかの家族療法モデルに積極的に取り入れられている。戦略的家族療法家であるヘイリーは、家族が困難を感じるのはおうおうにしてライフサイクル上の重大な移行期だという考えを強調した (Haley, 1980)。カーターとマッゴードリックは、各ライフサイクル上の発達の課題を、臨床家向けにまとめている。適度な機能水準を達成するためには、これらの課題を家族が遂行できるようにすることが、援助の指針となるのである (Carter and McGoldrick, 1980 ; 小此木, 1982)。

4. 家族内相互作用に関する社会的学習理論派の研究

親子間や夫婦間で、問題解決について相談や交渉をしてもらう。その際の相互作用を観察・測定し、健康な家族と問題をもつ家族の違いを、実験心理学的な手法を駆使して追求してきたのは、社会的学習理論派と呼ばれる研究者や臨床家達である。例えば、このようにして親子間の問題は以下の3点にまとめられた(Patterson and Reid, 1970; 武田・立木, 1980)。1) しつけのルールが明確ではなく、しかも一貫性を欠いている(コンティンジェンシーの欠如)。2) 嫌悪的な刺激によって、行動を常にコントロールする(強制, coercion)。3) 「目には目を、歯には歯を」の要領で、特に嫌悪的な刺激を交互応酬する(reciprocity)。このうち、1) コンティンジェンシーの欠如は、かじとりが「てんやわんや」である状態に対応し、嫌悪的な刺激による2) 強制(coercion)や3) 交互応酬(reciprocity)は、かじとりが「融通なし」であることに対応しよう。

夫婦間の相互作用についてはどうか。問題をもつ夫婦は1) 互いに嫌悪刺激による強制的コントロール(coercion)を常習すると報告されている(Patterson and Hops, 1972)。また、2) 否定的な発言の交互応酬性(reciprocity)も実証されてきた(Wills, Weiss, and Patterson, 1974; Gottman, Markman, and Notarius, 1977; Tatsuki, 1988 and 1989)。さらに、3) 問題をもつ夫婦では、相互作用のパターンに柔軟性を欠き、どのような相互作用が次に続くのか簡単に予測できてしまう(Gottman and Levenson, 1986)。これらの3点はすべて、夫婦間のかじとりが、きわめて硬くなっている(融通なし)ことを示している。

5. 要 約

初期の臨床家族理論は、形態維持の観点を重視した。これに対して、1970年代に入ると状況に応じた形態変容の観点も家族システム論に導入されるようになった。円環モデルでは、状況に応じて家族内のリーダーシップや役割、しつけや問題解決の交渉スタイルを柔軟に変化させる能力として、かじとりを考える。これは、トールマンらの家族内リーダーシップ構造の実証的な研究や、ロ

リンズやトーマスらに代表される親の養育態度が子供に与える影響に関する研究、あるいは家族療法家を対象とした調査、さらには社会的学習理論派の様々な実験的な研究に基づいて演繹されたものである。

なお、表2にかじとりに関係する研究を表にまとめてみた。

III 「きずな」と「かじとり」の両次元に関する実証的研究

ここまで見てきたように、「きずな」か「かじとり」の次元の、どちらか一つだけを用いた研究は多くある。しかし、ここではきずな・かじとりの両方の次元を含む研究に焦点をあてたい。この2次元を、同時に考慮することにより、家族機能について、さらに深い理解が得られるのである。

1. 家族ストレスに関する研究

エンジェルは『大恐慌下の家族』(The Family Encounters the Depression)と題した古典的研究で、大恐慌によって引き起こされた状況的なストレスに、家族がどう対処したかを、いくつかのタイプに家族を分類して考察した(Angell, 1936)。彼の研究の中心的概念は「家族のかじとり」(family adaptability)と「家族の統合」(family integration)であった。これは、「きずな」と「かじとり」の両次元を用いた最初の研究といえる。「家族の統合」は「家族生活全般にわたる一貫性や一体感からなる結合」と定義された。その中では「共通の興味や愛情、経済的相互依存がもっとも顕著である」(Angell, 1936, p. 15)。従って、家族の「きずな」と大変似通った概念といえる。一方、家族のかじとりは、一つの社会集団としてどう機能するか、困難に立ち向かう時の柔軟性や変化への適応度、また意思決定の方法などと関係する。

当初、エンジェルはかじとりのみ、あるいは統合のみ、または統合やかじとり以外の変数との組合せによって、家族を分析しようとした。こうした試みを繰り返した後、家族を「かじとり」と「統合」という二つの次元を用いて分類することに、概念上も、また実証的にも価値があること

表 2 a 家族の「かじとり」の次元に関する研究(1)

研究者	年	内 容
Wynne et al.	1958	融通のない現状維持は、家族病理の兆候であると述べた。
Haley	1959	家族システムの主機能は、現状維持と考えた。
Satir	1964	
Ashby	1960	家族システムの形態変容を重視し、定常性に基づかないシステムの統括原則を意味する「進化的フィードバック」の概念を追求した。
Bateson	1979	
Dell	1980	
Maruyama	1963	かじとり次元の中核概念である、形態維持(morphostasis)と形態変容(morphogenesis)について明らかにした。
Rappoport	1963	ライフ・サイクルの節目節目には正常な危機がおとずれ、家族はこれに適応しなければいけないとした。
Ferreira & Winters	1963 1965 1966	健康な家族は、成員が合意に基づいて意見や態度を一致させる。
Hill & Rodgers	1964	家族発達アプローチの視点から、家族には変化に応じてリーダーシップや役割の構造を変える能力が重要だと考えた。
Vincent	1966	家族の「かじとり」を「家族のスポンジ」という用語であらわし、急速に変化する社会の中では不可欠だとした。
Miller & Westman	1966	「かじとり」の尺度としてリーダーシップの変化を用い、健康な家族と学力に問題のある子供の家族を区別した。
Buckly	1967	家族のような社会文化的システムを説明する際に、Maruyamaの概念に基づいて正と負のフィードバックの重要性を説いた。
Miller	1969	家族機能の健康度に関する研究の中で、非機能的な極に形態維持の過程を、機能的な極に形態変容の過程を置いた。
Speer	1970	健康な家族の相互作用を説明するには、形態維持モデルだけでは説明しきれないものがあるとした。
Patterson & Reid	1970	社会的学習理論の中で、一貫性のないしつけ(てんやわらんや)や、強制的なまたは交互応酬的なしつけ(融通無し)は問題であるとした。
Tallman	1970	有能な家族ほど、リーダーシップに融通性があるとした。
Straus & Tallman	1971	SIMFAM 家族相互作用ゲームを考案し、模範的な問題解決状況で家族のリーダーシップを実証的に観察した。
Hill	1971	家族システムを形態維持の観点からのみ見る考えを批判した。
Bahr & Rollins	1971	SIMFAM 家族相互作用ゲームの中で、より民主的なリーダーシップを持つ夫婦は危機に対する能力が高いとした。
Kieren & Tallman	1971 1972	夫婦の「かじとり」は、相互に関係する融通性、共感、動機づけという3つの概念から成り立っているとした。
Patterson & Hops	1972	夫婦間の相互作用について、嫌悪刺激による強制コントロール(融通無し)は問題だとした。
Wertheim	1973 1975	家族の健康には、形態維持と形態変容のバランスが必要だと述べた。
Tallman & Miller	1974	SIMFAM ゲームを用いた研究の中で、中産階級と労働者階級では機能的なリーダーシップの形態が異なるとした。
Hunt	1974	思春期の子どもマリファナ使用と、「かじとり」の変数である親のしつけを結びつける研究をした。

表 2 b 家族の「かじとり」の次元に関する研究(2)

研究者	年	内 容
Wills, Weiss, & Patterson Gottman, Markman, & Not- arius	1974 1977	夫婦間の相互作用について、否定的な発言の交互応酬（融通無し）の問題性を実証した。
Rollins & Thomas	1975	「かじとり」の変数であるしつけに関して、極度の放任や権威のないしつけは非生産的だとした。
Balswick & Macrides	1975	親のしつけと子供の反抗に関する研究で、極端な放任や権威的なしつけは子供の反抗に結びついているとした。
Epstein & Santa-Barbara	1975	問題を持つ夫婦で意見が衝突したの問題解決のパターンを分類した。
Goldstein & Kling	1975	家族の団結という尺度をつくり、この中の変数に「かじとり」と共通する問題解決や役割関係などを含んだ。
Sprenkle & Olson	1978	SIMFAM ゲームを用いたリーダーシップの研究の中で、治療を受けている夫婦と統制群の夫婦を比較した。
Haley	1980	家族が困難を感じるのには、ライフ・サイクルの重大な移行期であることが多いと強調した。
Carter & McGoldrick	1980	各ライフ・サイクル上の発達的な課題をまとめ、適度な機能水準を達成するにはこれらの課題を達成することが重要であると示した。
Hoffman	1981	システム理論家たちの著作をレビューし、進化的フィードバックの観点から形態変容を重要視した。
Gottman & Levenson	1986	問題を持つ夫婦では、相互作用のパターンに柔軟性を欠き、どのような相互作用パターンが次に続くか簡単に予測できるとした（融通無し）。
Steinglass	1987	負のフィードバックはシステムの現状維持に、正のフィードバックはシステムの変化に必要なものであるとした。

を見いだした。彼はそれぞれの次元で家族を、高水準・中水準・低水準の3つのカテゴリーに分類し、家族を9つのタイプに分けた。そしてその内の8つを実証的に明示し、記述した。

これに続いてヒルは「統合」と「かじとり」を用い、両者を組み合わせて、「動的安定性」と呼ばれる尺度を作成した(Hill, 1949)。この尺度を用いて、戦争による離別や再会を体験した135家族を対象に、家族がどのようにこのストレス事態に対処したかを調べた。その際、「かじとり」と「統合」の二つの次元を組み合わせることで、家族を分類し、どのようなタイプの家族が、ストレスにもっともよく対処したかを調べている。ヒルは『全体として、家族の統合は別離と再会の両方に対処するのに重要である。しかし、別離よりも特に再会の対処に高く関係する。「統合」がきわめて高い家族は再会にもっともよく対処したが、離別に対する対処の成績では、第2位であった』(p. 132)と結論づけている。「家族のかじとり」は、再会よりも離別に対する対処に、より密接に関係している。しかし、「かじとり」のもっとも高い家族が、必ずしも離別や再会といった状況に、最適な対処をするとは限らない。「統合」と「かじとり」を組み合わせた典型的分析で、中程度の「統合」と高度の「かじとり」を持つ家族が、総合的に離別と再会の両方に、もっともうまく対処することがわかった。またヒルとその同僚は、急速な都会化に対して個人や家族がどう対処するのかを、かじとりと統合の二つの次元を、再度用いて研究している(Hill, Moss and Wirths, 1953)。

これらの初期の研究の後、きずな・かじとりの両次元を用いた理論的・実証的研究は、一時中断した。この状態は70年代のなかばまで続く。やがて、マカビンとその同僚が、エンジェルやヒルの研究を基礎とする一連の調査を再開した。マカビンは、職業上(ビジネスおよび軍事)の単身赴任によって生ずる家族の別離をテーマに、家族ストレスに対する対処の行動や、そのパターンを研究した(McCubbin et al., 1975, 1976, 1977, 1979, and 1982; Boss, 1980; Boss, McCubbin, and Lester, 1979; 石原, 1982)。

マカビンらも家族の「きずな」と「かじとり」の重要性を強調している。例えば、因子分析の結

果から、単身赴任に対する妻の対処行動が二つの次元に集中していることが示された。その二つの次元とは、1) 家族の一体化・統合の維持と、2) 家族メンバー個人の独立と自立の促進、である。つまり家族ストレスを処理することは、個人の発達・成長と家族の団結・統合との間の微妙なバランスを維持することにあるとされたのである(McCubbin, Boss, Wilson, and Lester, 1979)。

2. 家族概念に関する研究

ヴァン・ダ・ヴィーンも、家族の行動を評定する際に、きずなとかじとりに関連する概念が基本的な重要性をもつと考えた(Van der Veen, 1976)。これは『家族概念テスト(Family Concepts Test)』を用いた調査の結果に基づくものである。『家族概念テスト』は、家族の力動について包括的な情報を与えると臨床的に考えられた80の質問項目からできている。ただし、これらの項目は、なんらかの理論的枠組みから作られたものではない。むしろ、臨床家が経験的に重要だと感じている項目を精選することによって作られたものである。この尺度は、家族に対して個人がどのような態度や感情、期待(すなわち、家族概念)をもっているのかに注目する。家族概念テストは、思春期の子供やその親兄弟を含む、大規模なサンプルに対して実施された。思春期の子供の中には障害を持った者もいるし、健康な者もいた。このデータから、質問項目間の因子分析が行なわれた。第一段階として、主成分分析が行なわれ、固有値が1を超える因子が15まで認められた。続いて、さらに斜交解を用いた因子得点に対する因子分析、いわゆる二次因子分析(Second-order Factor Analysis)が行なわれた。その結果、15個の一次因子が『家族の統合(family integration)』か、『順応的対処(adaptive coping)』のいずれかに収斂されるという解釈がほどこされた。『家族の統合』はきずなの次元と大変似ている。「家族の忠誠」や、「離別」対「団結」、「葛藤」対「思いやり」、「開かれたコミュニケーション」、「疎外」対「親密」といった一次因子が含まれた。一方、『順応的対処』はかじとりの次元に似かよっている。これは、「実現化」対「不全感」や、「地域社会との社交」、「内的」対「外的」コン

トロールといった一次因子から成り立っている。家族概念テストの質問項目は、明確な理論的モデルから出発したのではなく、臨床家の直感をもとに構成されている。それにもかかわらず、二次因子分析の結果が円環モデルの各次元と大変似かよっていることは注目に値する。

ヴァン・ダ・ヴィーンらによる調査 (Van der Veen, 1976) や初期の研究 (Novak and Van der Veen, 1970; Van der Veen, 1965) の結果は、円環モデルによって仮設された関係とよく似ている。問題をもつ家族では、問題をもたない家族に比べて、成員の家族概念が低い。このことは、順応的対処についての全ての一次因子、及び家族の統合についての最初の三つの一次因子において見られた。

3. 家族カテゴリー・スキームの研究

どのような社会的変数が、健康な家族と問題のある家族を区別するのに重要かを調べるため、ウェストリーとエプスタインはカナダのモントリオール市内に住む110の一般の家族について調査した (Westly and Epstein, 1969)。彼らが注目した変数のうち問題解決・権力・権威・役割は、円環モデルのかじとりの次元と関係している。一方、自律性の発達は、家族のきずなに関係している (磯田・清水・大熊, 1987参照)。彼らの調査より、夫婦関係の調和度は、思春期の子供の情緒に大きな影響を与えることが実証された。たとえば、両親の夫婦関係が一方的な妻支配、あるいは夫支配である場合、子供には情緒の問題が起りやすい。これに対して、父親がリーダーシップを持ちつつも、民主的な家族で育った子供は問題が少なく、健康であった。自律性とは、どの程度家族の成員がひとりで意思決定できるか、すなわち家族システムからどの程度分化しているのかに関係している。自律性が奨励されている家族では、そうでない家族よりも、健康な子供が多かった。

家族カテゴリー・スキームは、その開発者であるエプスタインのカナダ、ハミルトン市のマクマスター大学への赴任にともない、より家族システム論的な視点が強化された。その結果生まれたものがマクマスター・モデル (Epstein, Bishop and Levin, 1978) である。さらに、エプスタイン

のマクマスター大学での共同研究者、サンタバーバラが更にスピノフし、計量心理学的な洗練度を高めたものはプロセス・モデル (Santa-Barbara, Steinhauer, and Skinner, 1981) として発表されている (Byles, 1986; 正木, 1986)。家族システムの機能を評価するために、マクマスター・モデルは以下のような次元に注目する。すなわち 1) 問題解決, 2) コミュニケーション, 3) 役割, 4) 情動の応答性, 5) 情動の関与, そして 6) 行動のコントロールである。このうち円環モデルのかじとりに対応するのは、1) 問題解決, 3) 役割, 6) 行動のコントロールである。また、きずなに対応するのは、4) 情動の応答性と 5) 情動の関与の程度である。

エプスタインらはマクマスター・モデルに基づいた家族診断質問紙 (Family Assessment Device, FAD; Epstein, Baldwin and Bishop, 1983) を作成した。この質問紙は、問題をもつ98の家族と218の健康な家族にほどこされた。判別分析の結果、67%の問題をもつ家族と、64%の健康な家族が、正確に判別された。また、モデルのそれぞれの下位尺度の得点は、両者の家族で有意な差が見られた (Epstein, Baldwin and Bishop, 1983)。また、他の尺度 (Philadelphia Geriatric Morale Scale および Locke-Wallace Marital Satisfaction Scale) との並存的妥当性は中程度の相関を示した。さらに、プロセス・モデルをもとに作成された質問紙 (Family Assessment Measure, FAM; Skinner, Steinhauer and Santa-Barbara, 1983) を用いた調査からも、同様の調査結果が報告されている。

しかしながら、これらの実証的調査はまた、マクマスター・モデルおよびプロセス・モデルの共通の問題点を報告している。それは、どちらのモデルでも、作成された質問項目や下位尺度間の相関がきわめて高く、因子分析をおこなうと、ただ一つの共通因子しか現れないという点である。これは、6つの下位次元が、モデルから想定されるように独立しているのではなく、すべてが関連しあっていることを意味する。問題解決から行動のコントロールまでの次元は、たとえば「きずな」や「かじとり」などのような、さらに高次の概念に演繹される必要があることを、これは物語って

いると言えるだろう (Tatsuki, 1985)。

4. ビーバーズ・ティンバーローン・グループの家族相互作用研究

ルイスやビーバーズらは「家族システム観察評定尺度 (FSRS, Family System Rating Scales) を作成した。この観察評定尺度を用いて、健康な家族と問題をもつ家族では、相互作用がどのように異なるのか、体系的な研究をおこなった (Lewis and Beavers et al., 1976 ; 鈴木, 1983)。この研究には、円環モデルの「きずな」と「かじとり」の次元に関係する変数が多数含まれている。彼らは33の健康な家族と、なんらかの問題をもつ70家族について調査した。家族の問題には、行動障害 (45家族) ・精神病 (18家族) ・神経症 (7家族) などが含まれていた。調査は、家族員に以下に示すような課題を行なってもらい、それをビデオに撮影することによって行なわれた。課題は全部で五つあり、1) お互いに賛同できないことについて話し合う、2) 何かについて一緒に計画する、3) 家族内の関係でもっとも苦痛に思っていることについて話し合う、4) 家族内でそれぞれの成員がどのような心理的距離関係にあるのかを版上に布置する、5) 家族の長所について話し合う、などである。

ビデオを再生し、家族の相互作用はビーバーズの理論モデルを操作化した家族システム観察評定尺度に基づいて評定された。ビーバーズの理論モデルは大きく六つの領域に言及している。これら六つの領域は円環モデルの次元と密接な関連が見られる。きずなに関連する領域としては、1) 家族員の分化、2) 別離や喪失への受容、3) 家族神話 (家族が共有している世界観)、そして4) 情動などがある。また、かじとりに関連する領域には5) 家族内の権力構造と6) 交渉がある (Tatsuki, 1985)。

ティンバーローン・グループの研究は、評価者間の信頼性・一致度が低いことや、ビーバーズの理論モデルを操作的に定義する上での混乱のために問題があった (Olson, Russell and Sprenkle, 1980 ; Tatsuki, 1985)。しかしティンバーローン・グループは、家族システム観察評定尺度の合計点を用いて、興味深い報告をしている。観察評

定尺度の合計点は、全体的な印象に基づいた家族の健康・病理性尺度と極めて高い相関 ($r=0.90$) を示した。ただし、同一の評定者が家族システムと健康・病理性の両方の観察評定を行なっているために、これがすなわち家族システム評定尺度の妥当性を示すものとは断定できない。ちなみに、独立した評定者によって行なわれた、問題症状をもつ本人の観察評定と家族システムの観察評定との相関は0.42と大幅に下がったものになっている (Lewis and Beavers et al., 1976)。

5. 家族の社会生態学的研究

スタンフォード大学のムースらは、家族環境尺度 (FES, Family Environment Scale) を用いて、家族に対して社会生態学的なアプローチを試みた (Moos and Moos, 1976)。家族環境尺度は、10の下位尺度から成り立っている。これらの概念のいくつかは、「きずな」や「かじとり」の次元と直接に関係している。きずなの次元は「きずな」と「独立」という二つの下位尺度によって測られる。かじとりの次元は「コントロール」と「組織」によって、コミュニケーションの次元は「感情表出」と「葛藤」という二つの尺度によって測られる。この尺度はいくつかの研究 (Druckman, 1979 ; Fuhr, Moos, and Dishotosky, 1981 ; Bell and Bell, 1982) で有益な結果を示した。一方、家族環境尺度のきずな下位尺度に対しては、構成概念について妥当性が欠如しているという指摘もある (Russell, 1980)。

6. 家族療法家の研究

家族のきずな・かじとり・コミュニケーションの各次元の重要性を、臨床家はどのように評価しているのだろうか。フィッシャーとスプレングルは310人の結婚・家族療法家を対象に調査をおこなった (Fisher and Sprenkle, 1977)。これらの臨床家に、きずなに関して10の変数、かじとりに関して7つの変数、コミュニケーションについて17の変数の重要性を評価してもらったのである。評価は各概念が、1) 健康な家族機能と2) 夫婦や家族に対する治療的介入の目標にとってどれくらい重要であるかによってつけられたものである。

1) 健康な家族機能に関して、「きずな」と「かじとり」の平均値は3.9, 「コミュニケーション」の平均値は4.0であった。これは三つの次元全てが大変重要であることを示している(5=極めて重要, 4=大変重要, 3=重要, 2=少し重要, 1=重要でない)。個々の変数について重要性の順位を見ると, その上位3分の1の内訳は, きずなに関連するものが30%, かじとりが29%, コミュニケーションが35%であった。次に, 2) 治療目標について見ると, きずなの平均値は3.6, かじとりが4.1, コミュニケーションが4.0で, これら3つの次元の改善が治療目標と関連していることが明らかにされた(5=常に, 4=たいてい, 3=しばしば, 2=めったに, 1=決して)。更に, 健康な家族機能と家族治療の目標との間にかんがりの一致が認められた。

一般の家族と臨床家では, 家族システムの健康観に違いが見られるのだろうか。フィッシャーらは, 問題をもたない一般の家族に対しても, 「健康な家族の特徴とは何か」について質問紙調査を行った(Fisher, Gibbin and Hoopes, 1982)。その結果を家族療法の調査(Fisher and Sprenkle, 1978)と比較している。両者の回答には決定的な違いが認められた。一般の家族では, 家族の同一化や健康管理, 情緒的魅力, 満足のいく相互作用, 忠誠といった項目に, 家族療法家よりも高い順位がつけられた。これに対して, 家族療法家は融通性やリーダーシップの分担, フィードバックの利用に, 一般よりも高い順位を与えた。つまり一般の家族はきずなの次元により高い価値を置き, 家族療法家はかじとりの次元に高い価値を置くことが見いだされたのである。

家族療法家については, その他の研究でも, きずな・かじとり・コミュニケーションの3つの次元が, 治療の目標設定に重要であることが示されている。これは, 270人の家族療法家を対象にした調査である(GAP, 1970)。ちなみに, これらの内40%がソーシャル・ワーカーで, もう40%は精神科医と心理学者, 残りの20%は結婚カウンセラーや他の専門職であった。調査では, これらの専門家に家族療法の第1の目標を, リストにのっている8つの中から選んでもらった。85%の専門家が「コミュニケーションの改善」をあげ, 56%が「共

感の改善」(コミュニケーションの次元)を, 56%が「自主性と個別化」(きずな)を, 34%が「より融通性のあるリーダーシップ」(かじとり)を, 23%が「葛藤の減少」(コミュニケーション)を, 12%が「個人の役割遂行の改善」(かじとり)をあげた。この研究で興味深いのは「症状の改善」という項目を除いて, 選ばれた項目はすべて, きずな・かじとり・コミュニケーションの各次元に関係しているということである。また回答者の90%が8つ全ての目標を, 第1次的にあるいは第2次的に重要だと答えた。

ミニューチンの構造家族療法は家族システムの境界とともに, 家族システムの適応性をも強調している(Minuchin, 1974)。境界は, ちょうど円環モデルのきずな次元に相当し, バラバラからベッタリの状態があり, 中程度の境界が健康とされる。また家族の適応性は, 円環モデルのかじとりの次元に対応している。家族療法家の中でこの二つの次元に直接視点をあてただけでなく, この二つの次元に関する考え方までが一致しているという点で, これは注目に値する。

ミニューチンは, 多くの家族がライフサイクルの過程で, 一時的にベッタリやバラバラの状態になる傾向があり, また子供の成長と共にサブシステム間の境界は明確化し, きずなは次第にバラバラになっていくべきだと語った。ただし, 次元の極端な段階で機能し続けることは問題であるとしている。このことは, まさに円環モデルの仮説と一致している。

かじとりの次元についてどうか。ミニューチンは, ストレスがしばしば家族変化の必要性を作り出すと述べている。治療を受けている家族の多くは, ある状況から別の状況への移行の段階にあり, 新しい状況に適応するために援助を必要としているのだと考えた。彼は以下のように述べている。「ストレスが発生したときに対処のパターンや境界の融通性がなくなり, 他にとるべき措置がとれない場合, この家族は病的であると見なされるのである」(Minuchin, 1974, p. 60)。ストレスは家族の内的あるいは外的圧力によってつくられる。家族システム内に新しい成員が加わったり(出産など), メンバーの欠損(独立, 死亡など), また子供が思春期を迎えるといった家族員の発達

的变化によってストレスは生じるのである。

7. 要 約

円環モデルの二つの次元（きずな・かじとり）は、夫婦・家族システムを理解する上で鍵となることが、多くの研究によって示された。もう一度簡単に振り返ってみると、エンジェルやヒルによる初期の研究は家族タイプを分類するのに、これら二つの次元の組合せが重要であることを示唆した。後にこれらの研究はマカビンらの研究に引き継がれた。マカビンらは家族がいかんしてストレスに対処するかを理解する上で、きずな・かじとりの次元の重要性を実証した。

ヴァン・ダ・ヴィーンは家族概念テストの結果に二次因子分析をほどこすことにより、きずな・かじとり次元の実証的実在性を例証した。また円環モデルの次元に関連する変数は、家族カテゴリー・スキームに関する研究、ビーバーズ・ティンバーローン・グループの研究、ムースらの研究によって実証的に認められた。フィッシャーらは家族療法家に対する調査から、きずな・かじとりの二つの次元の重要性について検討した。これら二つの次元は健康な家族機能と家族療法の治療目標を説明する上で、共に有益であるとされた。家族療法家に対する、また別の調査では、これらの次元に関連する変数の重要性をあらわしている。最後に、ミニューチンのような家族療法家はこれら二つの次元を診断上・治療上のプログラムに直接取り入れている。

多くの研究がきずな・かじとりの次元や、これらの次元に関連する変数を用いていることがレビューされた。これは、きずな・かじとりの両次元の有効性をあらわすと共に、円環モデルにこれらの次元を取り込むことの妥当性をあらわしていると言えるだろう。

なお表3には、きずな・かじとりの両次元を用いた研究を要約して表にまとめてある。

IV. 結 論

円環モデルではきずなを「家族の成員が互いに対してもつ情緒的結合」と定義する。きずなは、具体的には、以下のような変数から診断・測定さ

れる。それらは、情緒的結合、境界、連合、時間、空間、友人、意思決定への参加、趣味とレクリエーションである（表4参照）。円環モデルに使われている家族のきずなの定義は、二つの構成要素からなっている。両者とも、家族の成員相互の情緒的結合の程度に関係している。一つは家族メンバーを感情的に同一化させる側面で、家族のきずなの極端に強い段階（ベツリ）としてあらわされる。もう一つは反対に家族の成員を家族システムから遠ざけようとする側面で、きずなの極端に弱い段階（バラバラ）としてあらわされる。この二つの構成要素のバランスのとれた段階（ピツリとサラリ）で家族システムはもっともうまく機能し、個人の成長も促進される。とはいえ、バランスのとれた家族では、きずなが常に中庸な段階にあるとは限らない。必要とあれば、極端な関係にもなりうると考えるのである。ただし、そのような極端な関係は長く続かない。つまり、きずなのバランスのとれた家族は、状況的ストレスや発達的变化に応じて、どのような関係をもとりうる。その幅がひろいと推測されるのである。一方、きずなが極端な家族では、常にその極端な関係で固定している。それ以外の関係のありようは、考えられないのである。確かに文化的な規範の違いなどによってこれらの極端に位置する家族でも、こうした危機を問題なく乗り越えることがあるかもしれない。しかしバランスのとれていない極端な家族は、長期的に見れば、変化・成長していく過程で、より問題が発生しやすいといえる。

夫婦・家族システムのかじとりの次元を、円環モデルでは以下のように定義する。『かじとりとは、状況的・発達のストレスに応じて家族（夫婦）システムの権力構造や役割関係、関係規範を変化させる能力である。この次元に関連する具体的な変数は、家族の権力構造（自己主張と支配）や交渉（話し合いや処理）のスタイル、役割関係、関係規範などである』（表5参照）。基本的にもっとも健康な家族システムは、かじとりの次元のまん中の段階（キツチリと柔軟）に位置する。そしてこういった家族は形態維持と形態変容の間に、融通性の高いバランスが保たれている。そこでは、お互い、コミュニケーションを通じて言いたいことが言え、リーダーシップは民主的であり、交渉を

表 3 a 家族の「きずな」と「かじとり」の両次元に関する研究(1)

研究者	年	内 容
Angell	1936	「家族の統合 (family integration)」と「かじとり (adaptability)」を用いて、大恐慌下の家族のストレスについて研究した。
Hill	1949	家族の統合とかじとりを組み合わせて、動的安定性 (dynamic stability) という尺度を作成した。
Hill, Moss & Wirths	1953	急速な都会化に個人や家族がどう対処するか、家族のかじとりと統合を用いて研究した。
Van der Veen	1965	家族概念テストを用いた調査で、家族の統合と順応的対処 (adaptive coping) の重要性を強調した。また、これら2つの次元が、互いに独立であることを実証的に示した。
Novak & Van der Veen	1970	
Van der Veen	1976	
Minuchin et al.	1967	バラバラペーパー境界と家族の適応度を強調した。
Minuchin	1974	
Westly & Epstein	1969	家族の健康には、自主性の発達 (きずな) や、問題解決、権力、役割 (かじとり) という変数が重要であるということを強調した。
GAP	1970	家族療法家についての調査で、治療目標の設定に「自主性の個別化」(きずな)、「より融通性のあるリーダーシップ」(かじとり)、「個人の役割遂行の改善」(かじとり) といった変数やコミュニケーションに関する変数が重要であるということを確認した。
Reiss	1971 a 1971 b	家族の相互作用を研究し、環境に敏感な家族 (健康)、対人関係に敏感な家族 (非行)、一致に敏感な家族 (分裂病) という3つの行動パターンを明らかにした。
McCubbin et al.	1975 1976 1977 1979 1982 1979 1980	家族ストレスに対する対処や行動についての研究の中で、家族の「きずな」と「かじとり」の重要性を強調した。
Boss, McCubbin & Lester Boss	1976	親密・連合・4つの尺度を持つ自主性 (きずな) や、力関係・話し合い (かじとり) といった変数を含む Family System Rating Scales を作成した。
Lewis et al.	1976	Family Environment Scale を作成し、「きずな」・「独立」(きずな) や「コントロール」・「組織」(かじとり) といった尺度を用いて家族を分類した。
Moos & Moos	1979 1981 1982	FES を用いた研究で、「かじとり」の次元について有益な結果を示した。
Druckman Fuhr, Moos, & Dishotosky Bell & Bell	1980	FES の「きずな」の次元に関して、妥当性が次如していると指摘した。
Russell		

表 3 b 家族の「きずな」と「かじとり」の両次元に関する研究(2)

研究者	年	内 容
Beavers et al.	1976	Sterlin の求心性と遠心性の概念を用いて、独自のシステム・モデルをつくった。
Fisher & Sprenkle	1977	健康な家族機能と家族介入の目標に、「きずな」・「かじとり」・「コミュニケーション」の各概念が重要だとした。
Fisher & Sprenkle	1978	健康な家族の特徴についての調査で、家族メンバーは「きずな」の次元を、家族療法家は「かじとり」の次元に高く価値を置くことをあらわした。
Fisher, Gibbin & Hoopes	1982	
Epstein et al.	1978	家族カテゴリー・スキームの家族システム論的な視点をより強化し、問題解決・役割・行動のコントロール(かじとり)情動の応酬・情動の関与(きずな)といった次元を含む、マクマスター・モデルをつくった。
Santa-Barbara, Steinbauer & Skinner	1981 1983	マクマスター・モデルの計量心理学的な洗練度を高め、プロセス・モデルをつくった。
Druckman	1979	Family Environment Scale を用いて有益な結果を得る。
Fuhr, Moos & Dishotosky	1981	
Bell & Bell	1982	
Russell	1980	Family Environment Scale のきずな尺度には、妥当性が欠如していると指摘した。

表 4 家族のきずな (Olson ら, 1985 による)

	バラバラ		サラリ		ピッタリ		ベッタリ	
	1	2	3	4	5	6	7	8
情緒的結合	バラバラ、 帰属意識は皆無		サラリ、 たまに帰属意識示す		ピッタリ、 適度の帰属感有り。		ベッタリ、 過度の帰属要求	
家族相互作用への関与の度合	極めて低い関与。 成員間の感情的交流殆ど無し。		一步距離をおいた関与あり。感情的交流は一応見られる。		互いへの関与は強調されるが、ある程度の対人距離は認められる。感情的交流は奨励され、好まれる		高度に共棲的な関与。感情の相互依存が顕著に見られる。	
夫婦関係	情緒的にすっかり冷えきっている。		どちらかと言えば情緒的にドライな関係		情緒的にピッタリとした関係		情緒的に過度に反応する。	
親子間の連合	親子間に親密さが無い。或は、親子が連合してもう一方の配偶者と対立する。		親子間に明確な境界線が引けており、ある程度の親密さも存在する。		親子間に明確な境界線が引けており、しかも親密さも兼ね備えている。		過度の連合。両親と子供との間の世代間の境界が引けていない。	
内的境界	成員個々の距離が極めて大きい。		ある程度の距離感はあるがむしろ好まれる。		時に距離を置く事が必要だとは分っているが、余り重視されない。		対人的距離は皆無。	
(時間)	殆ど家族が一緒に時間を過ごす事はない。		一人でいる時間は大切にされる。たまには一緒にもなる。		皆で一緒にいる時が大切にされる。たまには一人もよい。		常に一緒に。一人でいることは許されない。	
(空間)	それぞれの別の場所にいることが必要で、好まれる。		それぞれ別の場所にいることが好まれるが、一家団らんの場所もある。		一家の団らんの場が大切にされる。一人になる場所も認められている。		一人になれる場所は存在しない。	
(意思決定)	個々独立した意思決定		一人で決定を下す。しかし家族合同で物を決めることは可能		合同での意思決定が好まれるが、必ずという訳ではない。		決定は家族全員の意思に基づかなければならない。	
外的境界	家族外部に全員の眼が向いている。		家族内よりは、家族外との関係の方が重視される。		家族外よりは、家族内の関係の方が重視される。		家族内にしか全員関心が無い。	
(友人)	別々に一人であう。		一人の友人が他の者の友人になることはまずない。		一人の友人が他の者の友人にもなる。		家族同士でつき合う友人しか持たない。	
(趣味)	全くかけ離れた趣味		個々各々にあった趣味を持つ。		共同の趣味を持つ。		共同の趣味しか許されない。	
(余暇活動)	個々別々		一緒によりは一人で		一人よりは一緒に		全員一緒に	

表5 家族のかじとり (Olsonら, 1985による)

	融通無し	キッチリ	柔軟	てんやわんや				
	1	2	3	4	5	6	7	8
リーダーシップ	権威主義的 高度の親支配	基本的には権威主義 たまに民主的にもなる。	変化に対して柔軟な 民主的リーダーシップ。	限定的で行きあたり ばったりのリーダー シップ				
しつけ	専制的, “法と秩序” 第一、厳格、例外や 寛大さなし。	ある程度民主的。 きっちりとしたしつ けあまり寛大では ない。	たいてい民主的。話 合いに基づいたしつ け。ある程度寛大。	ほったらかしで不適 切なしつけ首尾一貫 しない態度。とても 寛大。				
問題解決の相談	常に親が決定を下す	きっちりとした話し 合い。たいてい親の 意見で物事が決まる。	柔軟な話し合い。皆で 相談しあい、決定に 同意する。	小田原評定。行きあ たりばったりで衝動 的な意思決定。				
役割関係	役割がガッチリと 決っており、レパー トリーも少ない。	役割安定、しかし共 有もされ得る。	役割が共有され、新 たな役割作りがされ る。役割が、臨機応 変に変え得る。	明確な役割分担がな い。個人の役割がく るくる変わったり、 交替する。				
きまり	きまりには絶対に 変わらない。約束は 厳格に守られる。	ほとんできまりは 変わらない。約束は かたく守られる。	きまりといえども、 ある程度の変更は有 り得る。約束も柔軟 に運用される。	目まぐるしくきまり が変わる。約束の実 行が一貫していない。				

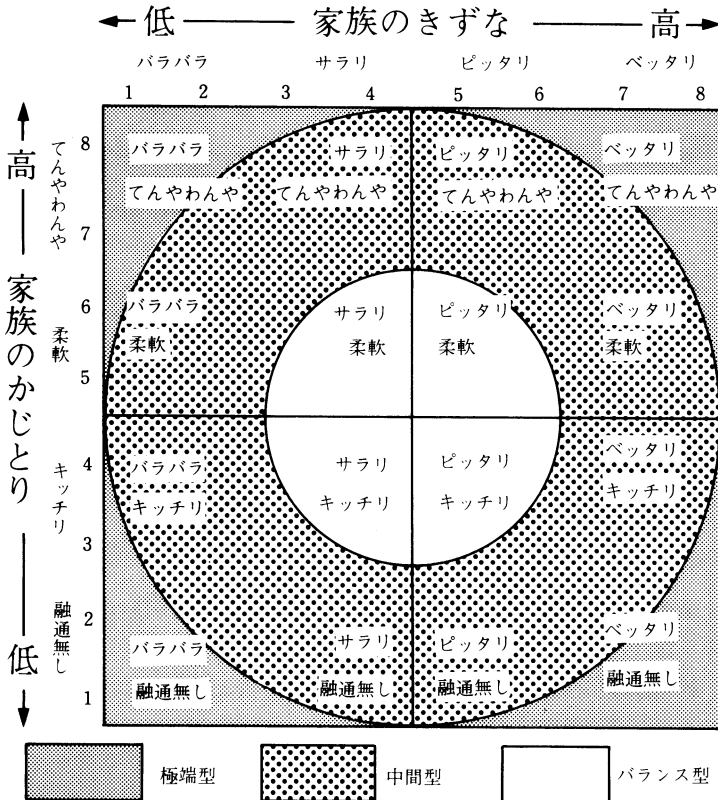


図-1 円環モデル(Olsonら, 1979による)

© David Olson

うまく進めることができる。また、正と負のフィードバックが適度に働き、役割を共有したり、必要ならば新しい役割をつくることもできる。そして、かくれたきまりはなく、きまりはすべて明快に示されている。反対に、非機能的な家族システムはこれらの変数がいずれかのかたちで極端である。

円環モデルは上記のきずなとかじとりの二つの独立する次元がつくる空間上で、家族システムの機能度を診断評価する。家族がこの空間の中央部に布置されればそれだけ健康であると考え。逆に、きずなもかじとりも極端で、空間の辺縁部に布置された場合、問題が生じやすいと考えるのである(図1参照)。

本稿では、円環モデルの拠って立つ基礎概念についてレビューを行なった。このモデルの理論的・実証的な検討については、稿を改めて取り上げたいと思う。

参考文献

- Angell, R. C. *The Family Encounters the Depression*. New York : Charles Scribner & Sons, 1936.
- Ashby, W. *Design for Brain*. London : Chapman & Hall, 1960.
- Bahr, S. J. & Rollins, B. C. "Crises and Conjugal Power." *Journal of Marriage and the Family*, 1971, 33, 360-367.
- Balswick, J. O. & Macrides, C. "Parental Stimulus for Adolescent Rebellion." *Adolescence*, 1975, 10, 253-266.
- Bateson, G. *Mind and Nature*. New York : E. P. Dutton, 1979.
- Beavers, W. "A Theoretical Basis for Family Evaluation" In J. Lewis, W. Beavers, J. Gassett, and V. Phillips (Eds.) *No Single Thread : Psychological Health in Family Systems*, NY : Brunner/Mazel, 1976. (米田裕, 国谷誠郎他訳, 『織りなす綾』国際医書出版, 1979年).
- Bell, L. O., & Bell, D. C. "Family Climate and the Role of the Family Adolescent: Determinants of Adolescent Functioning." *Family Relations*, 1982, 31, 519-527.
- Bergson, V., & Black, K. "Solidarity between Parents and Children : Four Perspectives on Theory Development." *Paper Presented at the Annual Meeting of the National Council of the Family Relations*, 1973.
- Birchler, B., Weiss, R., & Vincent, J. "Multimethod Analysis of Social Reinforcement Exchange between Maritally Distressed and Non-Distressed Spouse and Stranger Dyads." *Journal of Personality and Social Psychology*, 1975, 31, 349-360.
- Boss, P. G. "The Relationship of Psychotherapy Father Absence, Wife's Personal Qualities and Wife/Family Dysfunction in Families of Missing Fathers." *Journal of Marriage and the Families*, 1980, 45, 541-549.
- Boss, P., McCubbin, H., & Lester, G. "The Corporate Executive Wife's Coping Patterns in Response to Routine Husband - father Absence: Implications for Family Stress Theory." *Family Process*, 1979 18, 79-86.
- Bowen, M. "The Family as the Unit of Study and Treatment." *American Journal of Orthopsychiatry*, 1960, 31, 40-60.
- Buckley, W. *Sociology and Modern Systems Theory*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall, 1967.
- Byles, J. A. *A Personal Communication*, July, 1986.
- Carisse, C. "Family Leisure : A Set of Contradictions." *Family Coordinator*, 1975 24, 191-197.
- Carter, E., & McGoldrick, M. *The Family Life Cycle: A Framework for Family Therapy*. New York. Gardner, 1980.
- Cartwright, D., & Zander, A. (Eds.) *Group Dynamics: Research and Theory*. Evanston, IL : Row, Peterson, 1962.
- Dell, P. "Researching the Family Theories of Schizophrenia : An Exercise in Epistemological Confusion." *Family Process*, 1980, 19, 321-335.
- Druckman, J. A. "Family Oriented Policy and Treatment Program for Juvenile Status Offenders." *Journal of Marriage and the Family*, 1979, 41, 627-636.
- Epstein, N. B., Baldwin, L. M. & Bishop, D. S. "The McMaster Family Assessment Device." *Journal of Marital and Family Therapy*, 1983, 9, 171-180.
- Epstein, N. B., Bishop, D.S. & Levin, S. "The McMaster Model of Family Functioning." *Journal of Marriage and Family Counseling*, 1978, 40, 19-31.
- Epstein, N. B. & Santa-Barbara, J. "Interpersonal Perceptions and Stable Outcomes of Conflict Behavior in Clinical Couples." *Family Process*, 1975, 14, 51-66.
- Ferreira, A. "Decision-Making in Normal and Pathological Families." *Archives of General Psychiatry*, 1963, 8, 63-67.

- Feereira, A., & Winter W. "Family Interaction and Decision-Making." *Archives of General Psychiatry*, 1965, 13, 214-223.
- Feereira, A., & Winter W. "Stability in Interaction Variables in Family Decision-Making." *Archives of General Psychiatry*, 1966, 14, 352-355.
- Festinger, L., Schachter, S., & Back, K. *Social Pressures in Informal Groups*. New York : Harper. 1950.
- Fiedler, F., & Neuwese, W. "Leader's Contribution to Task Performance in Cohesive and Non-Cohesive Groups." In I. Steiner & M. Fishbein (Eds.), *Current Studies in Social Psychology*. New York : Holt, Rinehart & Winston, 1965.
- Fisher, B. L., Gibbin, P. R., & Hoopes, M. H. "Healthy Family Functioning : What Therapists Say and What Families Want." *Journal of Marital and Family Therapy*, 1982, 3, 273-282.
- Fisher, B. L., & Sprenkle, D. H. "Assessment of Healthy Family Functioning and Its Relation to Goals of Family Therapy." *Unpublished Manuscript*, Purdue University, 1977.
- Fisher, B. L., & Sprenkle, D. H. "Therapists' Perceptions of Healthy Family Functioning." *International Journal of Family Counseling*, 1978, 1-10.
- Fuhr, R., Moos, R., & Dishotsky, N. "The Use of Family Assessment and Feed Back in On-Going Family Therapy." *American Journal of Family Therapy*, 1981, 9, 24-36.
- Glueck, S. & Glueck, E. *Unraveling Juvenile Delinquency*. Cambridge, MA : Harvard University Press, 1950.
- Goldstein, H. K. & Kling, F. "The Measurement of Family Solidarity." *Unpublished Manuscript*, Florida State University, 1975.
- Gottman, J. M., Markman, H. & Notarius, C. "The Topography of Marital Conflict : A Study of Verbal and Nonverbal Behavior." *Journal of Marriage and the Family*, 1977, 39, 461-477.
- Gottman, J.M. & Levenson, R. W. "Assessing the Role of Emotion in Marriage." *Behavioral Assessment*, 1986, 8, 31-48.
- Group for the Advancement of Psychiatry (GAP), *Treatment of Families in Conflict*. New York : Science House, 1970.
- Haley, J. "The Family of the Schizophrenic : A Model System." *Journal of Nervous and Mental Disorders*, 1959, 129, 357-374.
- Haley, J. "Family Experiments : A New Type of Experimentation." *Family Process*, 1962, 1, 265-293.
- Haley, J. *Strategies of Psychotherapy*. New York : Grune & Stratton, 1963.
- Haley, J. *Leaving Home*. New York: McGraw-Hill, 1980.
- Hawkins, J. L. "Association between Companionship, Hostility and Marital Satisfaction." *Journal of Marriage and the Family*, 1968, 30, 647-650.
- Hawkins, J. L., Weisberg, C., & Ray, D. "Spouse Differences in Communication Style : Preference, Perception, Behavior" *Journal of Marriage and the Family*, 1980, 42, 585-593.
- Hess, R., & Handle, G. *Family Words : A Psychological Approach to Family Life*. Chicago : University of Chicago Press, 1959.
- Hill, R. *Families under Stress*. New York : Harper, 1949.
- Hill, R. "Modern Systems Theory and the Family : A Confrontation." *Social Science Information*, 1971, 10, 7-26.
- Hill, R., Moos, J., & Wirths, C. G. *Eddyville's Families*. Chapel Hill : University of North Carolina, 1953.
- Hill, R., & Rodgers, R. "The Developmental Approach." In H. T. Christensen (Eds.), *Handbook of Marriage and Family*. Chicago : Rand McNally, 1964.
- Hoffman, L. "'Enmeshment' and the Too Richly Cross-Jointed System." *Family Process*, 1975, 14, 457-468.
- Hoffman, L. *Foundation of Family Therapy*. New York : Basic Books, 1981.
- Hunt, D. G. "Parental Permissiveness as Perceived by the Offering and the Degree of Marijuana Usage among Offspring." *Human Relations*, 1974, 27, 267-285.
- 池埜聡「登校拒否に対するシステム家族療法の実証的研究-双対尺度法による相互作用分析」, 関西学院大学大学院社会学研究科修士論文, 1987年.
- 石原邦雄「家族ストレス論-社会学からのアプローチ」, 加藤正明・藤縄昭・小此木啓吾編, 『講座・家族精神医学4-家族の診断と治療・家族危機』, 弘文堂, 1982年, 343-371.
- 石川久展「 circumplex Model の理論的・実証的研究: 構念概念変当化過程による家族評価尺度関学院版 FACES (FACESKG) の作成過程」, 関西学院大学大学院社会学研究科修士論文, 1987年.
- 磯田朋子, 清水新二, 大熊道明「円環モデルをめぐる諸問題: モデルの生成・発展の過程」『家族療法研究』, 1987年, 27-39.

- Jackson, D. "The Question of Family Homeostasis." *Psychiatry Quarterly*, 1957, 31 79—90.
- Karpel, M. "Individuation : From Fusion to Dialogue." *Family Process*, 1976, 15, 65—82.
- Kieren, D. & Tallman, I. "Adaptability: A Measure of Spousal Problem—Solving (Tech. Rep. 1)." Minneapolis : Family Study Center, April, 1971.
- Kieren, D. & Tallman, I. "Spousal Adaptability : An Assessment of Marriage Competence." *Journal of Marriage and the Family*, 1972, 34, 247—256.
- Klugman, J. "Enmeshment and Fusion." *Family Process*, 1976, 15, 321—323.
- 国谷誠郎「アメリカにおける家族研究, 家族療法, 『臨床精神医学』14号(1), 1985年, 57—63.
- Lederer, W., & Jackson, D. *Mirages of Marriage*. New York : W. W. Norton, 1968.
- Lennard, H., & Bernstein, A. *Patterns in Human Interaction*. San Francisco, Ca; Jossey—Bass, 1969.
- Levinger, G. "Marital Cohesiveness and Dissolution : An Integrative Review." *Journal of Marriage and the Family*, 1965, 27, 1965.
- Lewis, J. M., Beavers, W. R., Gossert, J. T., & Philips, V. A. *No Single Thread: Psychological Health in Family Systems*. New York : Brunner/Mazel, 1976.
- Maruyama, M. "The Second Cybernetics :Deviation—Amplifying, Mutual Causal Processes." *American Scientist*, 1963, 51.
- 正木直道「家族機能モデルの実証的研究: プロセス・モデル臨床評価尺度の構成概念妥当化過程による批判的評価」, 関西学院大学社会学研究科修士論文, 1986年.
- McCubbin, H. I. "Integrating Coping Behavior in Family Stress Theory." *Journal of Marriage and the Family*, 1979, 41, 237—244.
- McCubbin, H. I., Boss, P., Wilson L., & Lester, G. "Developing Family Invulnerability to Stress : Coping Strategies Wives Employ in Managing Separation." In Jan Trosta (Eds.), *Proceedings : World Congress of Sociology*. Beverly Hills, CA: Sage, 1979.
- McCubbin, H. I., Dahl, B., Lester, G., Benson, D., & Robertson, M. "Coping Repertoires of Wives Adapting to Prolonged War—Induced Separations." *Journal of Marriage and the Family*, 1976, 38, 461—471.
- McCubbin, H. I., Dahl, B., Lester, G., & Ross, B. "The Returned Prisoner of War : Factors in Family Reintegration," *Journal of Marriage and the Family*, 1975, 37, 471—478.
- McCubbin H. I., & Lester, G. "Coping Behaviors in the Management of the Dual Stressors of Family Separation and Reunion." *Paper Presented at the Military Family Research Conference*, San Diego, September, 1977.
- McCubbin, H. I., & Olson, D. H. "Beyond Family Crisis : Family Adaption." In O. Hultaker and J. Trost (Eds.), *Families in Disaster*. Uppsala, Sweden: International University Library Press, 1982.
- McCubbin, H. I., & Patterson, J. M. "Family Adaption to Crisis." In H. McCubbin, A. Cauble, & J. Patterson (Eds.), *Family Stress, Coping and Social Support*. Springfield, IL : Charles C. Thomas, 1982.
- Miller, D. & Westman, J. "Family Teamwork and Psychotherapy." *Family Process*, 1966, 5, 49—59.
- Miller, S. L. "Couple Communication Patterns and Marital Satisfaction." *Visiting Scholars Seminars*, 1974, 13—34. Home Economics Centers for Research, University of North Carolina.
- Miller, S. "Family Crisis Intervention and Growth." *Unpublished Manuscript*, University of Minnesota, 1969.
- Minuchin, S. *Families and Family Therapy*. Cambridge, MA : Harvard University Press. 1974.
- Minuchin, S., Montalvo, B., Guerney, B. G., Rossman, B. L., & Schumer, R. *Families of the Slums*. New York: Basic Books, 1967.
- Moos, R.H., Bronet, E., Tsu, V., & Moos, B. S. "Family Characteristics and the Outcome of Treatment for Alcoholism." *Journal of Studies on Alcohol*, 1979, 40, 78—88.
- Moos, R. H., & Moos, B. A. "A Typology of Family Social Environments." *Family Process*, 1976, 15 357—371.
- Novak, A. L., & Van der Veen, F. "Family Concepts and Emotional Disturbance in the Families of Disturbed Adolescents with Normal Siblings." *Family Process*, 1970, 9, 151—171.
- Nye, F. I., & Rushing, W. "Toward Family Measurement Research." In J. Hadden and E. Borgatta (Ed.), *Marriage and Family*, IL : Peacock, 1969.
- 大熊道明「夫婦・家族システムの円環モデル」森岡清美・青井和夫編著『ライフコースと世代—現代家族論再考』, 垣内出版, 1985年.
- 小此木啓吾「家族ライフサイクルとパーソナリティー発達の病理」, 加藤正明・藤縄昭・小此木啓吾編, 『講座・家族精神医学3—ライフサイクルと家族の病理』, 弘文堂, 1982年, 1—42.
- 小此木啓吾『家庭のない家族の時代』, ABC出版, 1983

- 年.
- Olson, D. H., Portner, J. & Lavee, Y. *FACES III*, St. Paul, Minn. : Family Social Science, University of Minnesota, 1985.
- Olson, D. H., McCubbin, H. I., Barnes, H., Larson, A., Muxen, M., & Wilson, M. *Families : What Makes Them Work*. Los Angeles, CA : Sage Publishing, 1983.
- Olson, D. H., Russell, C. S., & Sprenkle, D. H. "Circumplex Model of Marital and Family Systems II : Empirical Studies and Clinical Intervention." In J. Vincent (Eds.), *Advances in Family Intervention, Assessment and Theory*. Greenwich, CT : JAI, 1980, 128-176.
- Olson, D. H., Sprenkle, D. H., & Russell, C. S. "Circumplex Model of Marital and Family Systems I : Cohesion and Adaptability Dimensions, Family Types and Clinical Application." *Family Process*, 1979, 18, 3-28.
- Orford, J., Oppenheimer, E., Egert, S., Hensman, C., & Guthrie, S. "The Cohesiveness of Alcoholism - Complicated Marriages and Its Influence on Treatment Outcome." *British Journal of Psychiatry*, 1976, 128, 318-339.
- Patterson, G. R. & Hops, H. "Coercion, a Game for Two: Intervention Techniques for Marital Conflict." In R. E. Ulrich and P. Mounjoy (Eds.), *The Experimental Analysis of Social Behavior*, New York : Appeton-Century-Crofts, 1972.
- Patterson, G. R. & Reid, J. B. "Reciprocity and Coercion : Two Facets of Social Systems." In C. Neuringer and J. L. Michael (Eds.), *Behavior Modification in Clinical Psychology*. NY : Appleton-Century-Crofts, 1970.
- Rappoport, R. "Normal Crises, Family Structure and Mental Health." *Family Process*, 1963, 2, 68-79.
- Reiss, D. "Varieties of Consensual Experience I : A Theory for Relating Family Interaction to Individual Thinking." *Family Process*, 1971a, 10, 1-27.
- Reiss, D. "Varieties of Consensual Experience II : Dimensions of a Family's Experience of Its Environment." *Family Process*, 1971b, 10, 28-35.
- Riskin, J. "Methodology for Studying Family Interaction." *Archives of General Psychiatry*, 1963, 8, 343-348.
- Rollins, B. C. & Thomas, D. L. "A Theory of Parental Power and Child Compliance." In R. C. Cromwell & D. H. Olson (Eds.), *Power in Families*. New York : John Wiley, 1975.
- Rosenblatt, P. C., & Budd, L. "Territoriality and Privacy in Married and Unmarried Cohabiting Couples." *Journal of Social Psychiatry*, 1975, 97, 67-76.
- Rosenblatt, P. C. & Cunningham, M. R. "Television Watching and Family Tensions." *Journal of Marriage and Family*, 1976, 38, 105-111.
- Rosenblatt, P. C. Nevaldine, A. & Titus, S. L. "Farm Families : Relation of Significant Attributes of Farming to Family Interaction." *International Journal of Sociology of the Family*, 1972, 8, 89-99.
- Rosenblatt, P.C. & Russell, M. "The Social Psychology of Potential Problems in Family Vacation Travel," *Family Coordinator*, 1975, 24, 209-215.
- Rosenblatt, P. C., & Titus, S. L. "Together and Apart in the Family." *Humanities*, 1976, 12, 367-379.
- Russell, C. S. "A Methodological Study of Family Cohesion and Adaptability." *Journal of Marriage and Family Counseling*, 1980, 6 (4), 459-470.
- Sandberg, N., Sharma, V., Wodtli, T., & Rohila, P. "Family Cohesiveness and Autonomy of Adolescents in India and the United States." *Journal of Marriage and the Family*, 1969, 31, 403-407.
- Santa-Barbara, J., Steinhauer, P. & Skinner, H. (Eds.) *The Process Model of Family Functioning Theory, Research and Clinical Applications*. A Monograph, Toronto, 1981.
- Satir, V. *Conjoint Family Therapy*. Palo Alto, CA : Science and Behavior Books, 1964.
- Satir, V. *Peoplemaking*. Palo Alto, CA : Science and Behavior Books, 1972.
- 佐藤美和子「家族評価に関する理論的・実証的研究」, 関西学院大学大学院社会学研究 科修士論文, 1986年.
- Schaffer, H. R. "The Too Cohesive Family : A Form of Group Pathology." *International Journal of Social Psychology*, 1964, 10, 266-275.
- 清水新二, 高梨薫「アルコール依存症の家族システムとその変化」, 未発表原稿.
- Skinner, H. "Self-Report Instruments for Family Assessment." T. Jacob (Eds.), *Family Interaction and Pscynopathology*. New York : Plenum Press, 1987, 427-452.
- Skinner, H., Steinhauer, P., & Santa-Barbara, J. "The Family Assessment Measure." *Canadian Journal of Community Mental Health*, 1983, 2, 91-105.
- Speer, D. "Family Systems : Morphostasis and Morphogenesis, or is Homeostasis Enough?" *Family Process*, 1970, 9, 259-278.

- Sprenkle, D., & Olson, D. H. "Circumplex Model of Marital Systems IV : Empirical Study of Clinic and Non-Clinic Couples" *Journal of Marriage and Family Therapy*, 1978, 4, 59-74.
- Stanton, M. D., & Todd, C. T. *The Family Therapy of Drug Abuse and Addiction*. New York : Guilford, 1982.
- Steinglass, P. "A Systems View of Family Interaction and Psychopathology." *Family Interaction and Psychopathology*, New York : Plenum Press, 1987, 25-65.
- Stephens, W. *The Family in Cross-Cultural Perspective*. New York : Holt, Rinehart & Winston, 1963.
- Stierlin, H. *Separating Parents and Adolescents*. New York : Quadrangle, 1974.
- Straus, M. "Communication, Creativity, and Problem Solving Ability of Middle- and Working-Class Families in Three Societies." Reprinted in M. Sussman (Eds.), *Sourcebook in Marriage and the Family* (3rd ed.). Boston : Houghton Mifflin, 1968.
- Straus, M. A. & Tallman, I. "SIMFAM : A Technique for Observational Measurement and Experimental Study of Families." In J. Aldous et al. (Eds.) *Family Problem Solving*, III : the Dryden Press, 1971.
- Strodtbeck, F. "Family Interaction, Values, and Achievement." In D. McClelland et al. (Eds.), *Talent and Society*. Princeton, NJ : D. Van Nostrand, 1958.
- 鈴木浩二『家族救助信号』, 朝日出版社, 1983年.
- 武田丈「家族機能評価モデルの理解と考察」, 関西学院大学社会学部卒業論文, 1987年.
- 武田建・立木茂雄, 『親と子の行動ケースワーク』, ミネルヴァ書房, 1980年.
- Tallman, I. "The Family as a Small Problem Solving Group." *Journal of Marriage and the Family*, 1970, 32, 94-104.
- Tallman, I. & Miller, G. "Class Differences in Family Problem Solving : The Effects of Verbal Ability, Hierarchical Structure, and Role Expectations." *Sociometry*, 1974, 37, 13-37.
- Tatsuki, S. "Critical Evaluation of Family Functioning Models and Their Assessment Measures from the Construct Validation Paradigm." *Unpublished Manuscript*, 1985.
- Tatsuki, S. "An Exploratory Analysis of Sequential Categorical Data on Marital Interaction : Dual Scaling Approach." 『情報科学研究』, 1988, No. 3, 1-21.
- Tatsuki, S. "A Formula for Marital Happiness : What Analyses of Verbal and Nonverbal Communication Patterns Can Tell Us." 『情報科学研究』, 1989, No. 4, 19-54.
- 上野正子・亀口憲治「家族療法におけるシステム図の役割」, 『家族心理学年報』, 第5巻, 1987年, 175-191.
- Thibault, J., & Kelley, H. *The Social Psychology of Groups*. New York : John Wiley, 1967.
- Van der Veen, F. "The Parent's Concept of the Family Unit and Child Adjustment." *Journal of Counseling Psychiatry*, 1965, 12, 196-200.
- Van der Veen, F. "Content Dimensions of the Family Concept Test and Their Relation to Childhood Disturbance." *Unpublished Manuscript*, Institute for Juvenile Research, Chicago, 1976.
- Vincent, C. "Familia Spongia: The Adaptive Function." *Journal of Marriage and the Family*, 1966, 28, 29-36.
- Wertheim, E. "Family Unit Therapy and the Science and Typology of Family Systems" *Family Process*, 1973, 12, 361-376.
- Wertheim, E. "The Science and Typology of Family Systems II : Further Theoretical and Practical Considerations." *Family Process*, 1975, 14, 285-308.
- Westly, W. A., & Epstein, N. B. *Silent Minority : Families of Emotionally Healthy College Studies*. San Francisco : Jossey-Bass, 1969.
- Williams, A. "Behavioral Interaction in Married Couples." *Unpublished Doctoral Dissertation*, University of Florida, Gainesville, 1977.
- Wills, T. A., Weiss, R. L., & Patterson, G. R. "A Behavioral Analysis of the Determinants of Marital Satisfaction." *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 1974, 42, 802-811.
- Wynne, L., Ryckoff, I. M., Day, J., & Hirsch, S. I. "Pseudo-mutuality in the Family Relations of Schizophrenics." *Psychiatry*, 1958, 21, 205-222.
- Yalom, K. *Family Life in Our Society : The Social Welfare Forum*. New York : Basic Books, 1970.